

アドリアン・マリノ 著
波邊洋・佐藤伸宏 訳

戦う比較文学

10・5刊、四六判280頁、2600円

勁草書房

日本における比較文学の専門研究において「比較文学とは何ぞや」という原理的考察および論争は、「この所」休戦」状態である様に思われる。研究方法は影響関係の裏証にやまらずあらゆる可能性が試みられ、個々の研究の成熟度によってのみ、その価値がはかられている時代といつても良いだろう。アドリアン・マリノの著書はそれに対して今一度、私達を原点の設問へと引き戻す——比較文学とは一体何なのか——と。

原著の題名が『エチアンブル——あるいは戦う比較文学』(一九八二年、ガリマル社)であったことから理解される様に、本書はフランスの比較文学者ルネ・エチアンブル(一九〇九—)へのオマージュと、それを基調とした「戦う比較文学」研究の宣言で責かかれている。フランスの形骸化した実証主義的比較文学研究を痛烈に批判したエチアンブルの研究姿勢は、彼の論文「比較は理ならず——比較文学の危機」(一九六三)によつてすでに広く知られている。一切の国粹主義、井の中の蛙(カマドノウメ)主義に抗して比較文学の対象をあらゆる国の文学に求めるとして、西洋優位の歴史的影響関係の測定という従来の偏狭な方法論を解き放ち、テキストの読みから出発する比較詩学をめざすべきであること——という彼の主張は、そのまま現在でも充分に有効であることが本書では再確認されている。ただしマ

論の具体的検討というよりもむしろ「権威なき子供」の異名をとった積極的な改革者としての姿勢を受け継ぎ、戦う比較文学の擁護と掲揚にこそは力を注いだ様である。マリノは現代世界の論戦に十分関連づけられ、組み込まれ、イデオロギー的方向づけられた現代的な活力あふれる学問を希求する。つまり彼はエチアンブルと同様に「合理主義、普遍主義、人間

ヨーロッパ中心主義を拒絶

今日のかつ具体的で生きた比較文学が

今 橋 映 子

及、特に東西の文学的交流の推進翻訳や普遍的言語の重要性新しいヒューマニズムの確立を説くことによつて従来の学問体制にたらわれない生きた比較文学を提唱する。最後には、限定された研究領域に閉じてもらない将来の比較文学者の育成、また書誌、用語集、辞書など今後国際団体が担うべき活動の方向性を指し示すことで、まさに今日のかつ具体的提言で締めくくられているのである。

ところが、以上の様にいざなか声高に宣言される「ヨーロッパ中心主義の終焉」に対して、やはり私達は首をかしげざるを得ない。例えば中国の古典文学や、日本の俳句がヨーロッパ文学に比べて決して劣らぬものであることはあまりに当然の事実ではないか。半世紀近いエチアンブルの仕事を経てもおお、比較文学の再編成が新たに叫ばれねばならぬといつていい。私達はヨーロッパの比較文学の現況を見るべきなのであろう。またマリノ自身が属している東欧世界の文学が、同じく「ヨーロッパ意識」をもっているにもかかわらず西側から排除されてきたという固有の歴史的状況が、本書の主張の淵源でもあることに思い至るのである。

それにもかかわらずルーマニア人の著者が本書をフランス語で執筆したことは意味深い。彼が度々触れている国際比較文学会は一九九一年、東洋で初めて東京で開催されることになっている。欧米とは全く異なる状況の中で成熟してきた日本の比較文学は、比較文化の視点を包含しつつ、近代化の諸相、アジア諸国間文学、諸皇帝の相互交渉、比較詩学等、幅広い領域を開拓してきた。その成果をふまえ私達はいかに世界と「対話」し得るのか——その答えが今、切に求められている様に思う。